

朽木谷の 自然と社会の変容

水野一晴・藤岡悠一郎 編



海青社

朽木谷の自然と社会の変容

水野一晴・藤岡悠一郎 編



海青社

朽木の自然環境

1章



花折断層による破碎帯が削られてできた朽木谷を流れる安曇川

朽木は安曇川沿いの、東に高度1200mに達する比良山地、西に標高900m以下の丹波高地に挟まれた谷に位置し、かつては林業が盛んであった土地である。冬は寒く、雪深い。京都から車で1時間あまりの距離にあるものの、今なお古くからの伝統や慣習が色濃く残っている。この朽木谷の自然はどのような地形や気候によってもたらされているのであろうか？

朽木の特色ある植生と植物

2章



雪の多い朽木を特徴づける日本海型のブナ林

ある地域の暮らしや文化を学ぶ時、その背景となる自然環境が深くかかわっていることに気づく。例えば、雪の多い所では住宅を建てる時、雪の重みに耐えることのできる建築材として、多雪の中で根曲がりしたものを軒材に使用する。朽木の暮らしや文化を培った自然(植生)は何を反映して成立し、どのような特色をもっているのだろうか？



安曇川を下る筏(高島市教育委員会所蔵)

勇ましく筏に乗る3人の筏師たち。この風景は、戦後まもなくまで安曇川流域で見られた風景である。豊富な山の恵みを活かした生業は、時代の流れとともに大きく変化してきた。かつては、この地域にとっての主要な産業であった林業もそのひとつである。過去の人びとの自然との向き合い方は、現在を生きる私たちに何を教えてくれるのだろうか？



朽木に売られている鯖寿司

鯖街道と朽木の地形



朽木を巡っていると、しばしば「鯖」の字を目にする。鯖寿司、焼き鯖、鯖のへしこなど、道の駅やその周辺の店舗には様々なサバ加工品が売られている。さらに、朽木の中心部である市端村^{いちば}を通る国道367号は別名で「鯖街道」と呼ばれている。なぜ海の近くでもない朽木でサバが地域の特産品として売られ、街道の名称にまでなっているのだろうか？

“流域”を超える朽木のモノと生き物

👉 5章



安曇川源流のひとつ(朽木生杉^{かいすき})

^{おおかわ}「大川」という言葉が、朽木の人の話の中によく出てくる。大川の名がつけられた神社もある。しかし、地図上にはどこにも「大川」という川はない。朽木の暮らしの中で、川との関わりにおいて「大川」とはどのような存在なのだろうか？

ヤマとタンポを結ぶホトラ

👉 6章



現在のホトラヤマの景観

朽木には、かつてホトラヤマが集落の周囲に広がり、人々は毎年春先に集落総出の共同作業によってヤマを焼き、その後には芽生えた膝丈ほどのコナラの幼樹(これをホトラと呼ぶ)の茎葉を各世帯の女性が刈り取った。現在森林化が進んでいるホトラヤマは、かつてどのように利用され、どのような変遷をたどっていったのであろうか？



朽木の山中にある炭焼き窯跡

朽木の山林を歩くと、山肌の斜面の小道沿いに大きな窪みを発見することがある。窪みの中に入ると足元に散らばる黒い小片に気づく。手に取ってみると、それは炭化した木片だということがわかる。実は、窪みの正体は人びとが炭焼きを営んでいた名残なのである。朽木の人びとにとって、炭焼きはどのような意味を持って営まれてきたのだろうか？

用材と木地を生んだ針広混交林



朽木の針広混交林

朽木の山を眺めると、森林が景観の基盤となっていることが感じられる。広葉樹林の中に分け入ると枝を四方に伸ばしたアシウスギの姿を見かけることも多い。朽木では、このような針広混交林を利用しながら地域の暮らしが維持されてきた歴史があるが、それは一体どのような営みであったのだろうか？



朝市で販売される山菜

春先、朽木の朝市を訪れると、コゴミやタラの芽、フキ、ゼンマイなど、売り場にみずみずしい山菜が並べられている。聞くところによると、最近は山に入る機会もほとんどなくなり、昔に比べて山の幸の利用も大きく変わってしまったそうである。この地域では、食料としての植物利用はどのように変化し、そしてその原因は何だったのだろうか？

トチ餅— 伝統食からおみやげへ



トチ餅づくりに重要な灰を使ったアク抜き

朽木の人びとは昔から、トチノミを採集しトチ餅をつくってきた。伝統食であり、救荒食でもあったトチ餅は、今日、朽木を代表するおみやげになっている。トチ餅はどのようにつくられているのだろうか？また、トチ餅が伝統食からおみやげへと変貌を遂げる過程には、人びとのどのような工夫があったのだろうか？



はりはた ふるや みわらばとけ
針畑川沿いの古屋の川原仏

朽木も久多も安曇川水系に属し、安曇川流域の地主神で筏乗りに崇拜された志古淵神を信仰し、若狭街道沿いにあり、盆には川原仏・川地藏・六体地藏を作り、林業を主産業にしていた。江戸時代、久多の大半と朽木は朽木氏に支配されていた。朽木も久多も朽木氏の支配地であったのに、現在、朽木は滋賀県に属し、久多は京都市左京区に属しているのはなぜだろうか？

朽木の生き物と人々の関わり



木に産みつけられたモリアオガエルの卵塊

6月初旬、針畑川源流の住民の方に「面白いものがある」と田んぼに誘われた。木々の枝に白い綿のような塊がいくつもぶら下がっていた。「モリアオガエルの卵だよ」案内してくれた男性が教えてくれた。近年、野生動物による農作物への被害が深刻化してきている。これまで人々は生き物をどのように認識し、いかに利用してきたのだろうか？



鳥居のない社(雲洞谷犬丸 下社)

朽木にはところどころに小さな社がある。鳥居がないので神社ではないかもしれない。が、しめ縄があるのでただの小屋ではない。集落や道路の片隅にひっそりと佇む社は、めだたないからこそ集落や地域独自の歴史と暮らしの中で今日まで祀られ、そこにあり続けたのだろう。これらの聖地は、どのような思想のもとに、何が祀られているのだろうか？

過疎・高齢化の進行と直面する課題



朽木で開催されている集落座談会

旧朽木村では古くから行政や住民が様々な事業やまちづくり、むらおこし活動を実践し、過疎地域対策に取り組んできた。村政が発足した戦前から現在に至るまでのこのような取り組みについて、現在朽木に住む人々はどのように感じているのだろうか？



行商から買い物をする利用者の様子

かつての行商人は朽木のような山間部にも様々な商品を届けてきた。また、行商人を泊めるなど個別の社会関係も存在していた。何もかもが便利になったように思える現代社会において、いったいどのような人々が行商を利用し、行商人からモノを買うことは生活においてどのような意味を持っているのだろうか？

トチノキの巨木と伐採問題



朽木のトチノキ巨木林

2010年の秋ごろから、朽木は度々新聞記事に取り上げられた。それは、トチノキの巨木の伐採問題や保護・保全に向けた運動に関する記事であった。どうしてトチノキの伐採は問題となり、保全活動が展開してきたのだろうか？ 朽木のトチノキ巨木はどのような環境に生育しているのだろうか？

獣害問題の深刻化

17章



集落の周囲を広く囲む柵



ナイロン製のメッシュ



作物を覆うネット

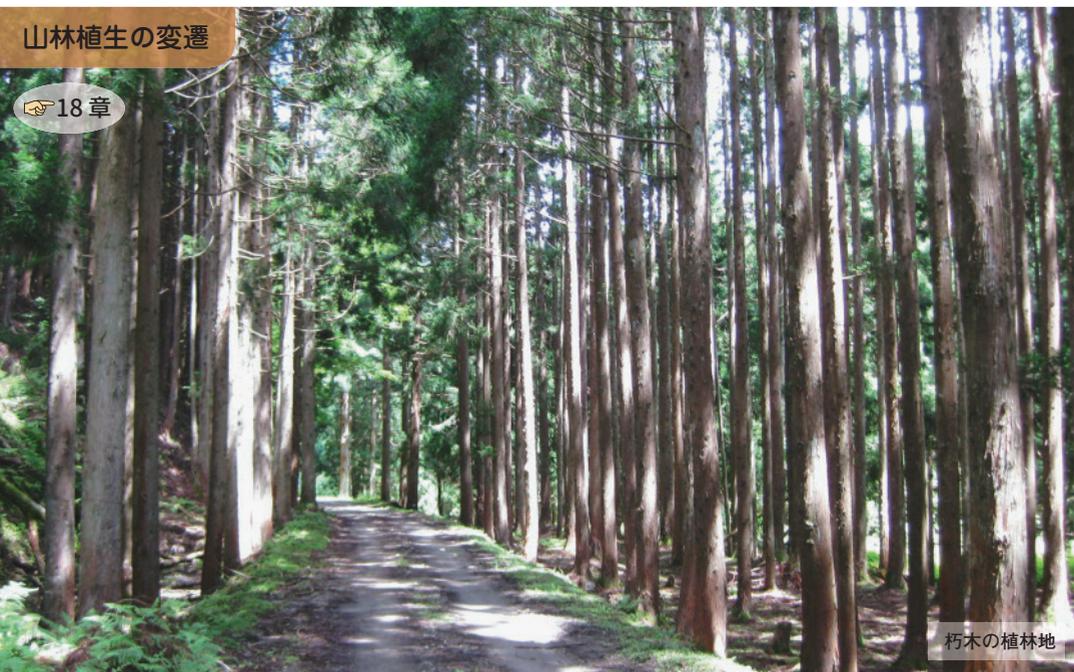


電気柵

朽木を車で走っていると、集落や畑の周囲に設置された無数の柵が目が留まる。野生動物との戦いが起きていることが容易に想像できる。森林を歩くと、本来ならば草本や樹木の稚樹が生えているはずの林床は、土がむき出しになっている。日本全国で野生動物と人々との関係が変わりつつあるが、朽木ではどのような変化が生じているのだろうか？

山林植生の変遷

18章



朽木の植林地

朽木は、京都から車で1時間程度と訪れやすい地域である。そのため、京都・大阪方面から気軽に行ける「田舎」や「山里」として訪れる人もみられる。特に北川上流部や針畑川沿いの地域は、「山深い」と表現されることが多く、安曇川沿いの市場地区などとは違った景観とみなされている。朽木の山林は昔からずっと同じような景観であったのだろうか？



朽木新本陣で開催されている朝市

ある地域の産業や食文化などを知りたいとき、まずその地域の市場を訪れるとよいだろう。朽木の中心地では、毎週日曜日朝市が開催されている。朽木の朝市では約30年に渡って多様な商品が販売され続けている。朝市の開催は地域資源の活用に関わり込んでいるのであろうか？ また、その原動力は何なのであろうか？



朽木らしさの未来を考える

朽木の未来へつなぐ物語づくり第3回の様子

朽木は京都の街中にとっても近い一方、小屋を組む木の番線の結び方一つとっても先達の知恵が詰まっていることを知る。人々が朽木に対して抱く豊かさや魅力の源泉が、これらの要素がないまぜになっていることにあつたら、これを表現して共有し、未来に引き継いでいくにはどうすればよいのか？

このプレビューでは表示されないページがあります。

はじめに

地理学では、自然地理学(地形や気候、植生、土壌など)と人文地理学(都市、山村、人口、農業、経済、文化、歴史など)に分かれているが、それぞれ別個に研究や調査が行われ、それらの関係性については検討されないことが多い。しかし、現実には自然と人々の暮らし・社会は相互関係のもとに成り立っている。本書は、京都近郊の「朽木」地域をとりあげて、その特徴的な自然、すなわち、朽木の気候や地形、植生のなかで、人々がどのような暮らしや社会を作り上げてきたかを理解してもらおうという狙いがある。また、それによって、「朽木」という場所の自然の多様性と現在まで脈々と流れる歴史と伝統が理解され、「朽木」により興味をもっていただけることを期待している。

本書では、各章の最初に1枚の特徴的な写真と、その写真が表す【興味深い朽木の着眼点】が述べられ、読者の方々に疑問が投げかけられている。読者のみなさんに考えていただきながら、各著者はその疑問を解決すべく、いろいろな調査手法をとって紐解いていく。調査手法をあえてはっきりさせるために、各章の最後に、【調査手法】としてまとめられている。本文にはいろいろな地名がでてくるが、だいたいの位置関係は巻頭の地図で確かめていただけるとよい。章ごとに扱われている時代が様々なため、巻頭に簡単な年表(表0-1)もあげた。さらに学びたい人のために巻末に参考文献リストを載せている。

各章のテーマは自然から社会、文化、歴史と、様々であるが、興味ある章から読み始めていただいてもかまわない。そして、このような研究や調査をしようと考えている学生さんや若手研究者の方々には、調査の仕方や結果を導く過程を真似していただいて、ご自分の研究にぜひ活かしていただきたい。また、日本の中山間地帯の自然や社会を対象とする授業等の参考書となれば幸いである。

最初に「朽木」がだいたいどんなところなのかを知っていただくために、朽木の概略を述べる。

表0-1 年表

時代	西暦	朽木での主な出来事	西暦	国内の主な出来事
縄文		池の沢で石斧と石鏃が発見される		日本列島の形成
弥生				稲作の開始
古墳・飛鳥		上田遺跡(村井)で土器片が発見される	645 701	大和朝廷の国土統一 大化の改新 大宝律令が成立
奈良	759- 62 762	奈良東大寺のための用材が高島の奥山から伐り出される 正倉院文書に小川津の記事がみられる	710	都を平城京に移す
			752	東大寺大仏完成
平安	851 1001	子田上柚が藤原氏の家領となる 平惟仲が朽木荘を白川寺喜多院に寄進する	794	都を平安京に移す
			1086	院政が始まる
鎌倉	1287 1299	佐々木義綱が父頼綱から朽木荘地頭職を譲られる 久多荘からの材木通行税の徴収開始	1192	源頼朝が征夷大將軍になる
			1221	承久の乱
室町	1570	朝倉攻めに失敗した織田信長が朽木谷を通る	1549	ザビエルがキリスト教を伝える
安土・桃山	1590	朽木軍が秀吉の小田原攻めに参加	1590	豊臣秀吉が全国を統一
	1600	朽木元綱が関ヶ原の戦いに参戦	1600	関ヶ原の戦い
	1601	朽木元綱が朽木荘他9,595石を安堵される		
江戸	1662	寛文地震発生。武奈ヶ岳のイオウの禿で斜面が崩壊	1639	鎖国
	1837	飢饉発生。朽木でも多数の死者	1837	大塩平八郎の乱
明治	1868	朽木の各村が大津県の統治下に入る	1869	版籍奉還
	1872	朽木の各村が犬上県さらに滋賀県に編入される	1871	廃藩置県
	1889	旧21か村を併合して朽木村が誕生	1889	大日本帝国憲法が發布
	1889	暴風雨により北川と安曇川が決壊	1894	日清戦争が起こる
	1911	朽木村産牛組合が設立	1911	関税自主権を獲得

表0-1 つづき

時代	西暦	朽木での主な出来事	西暦	国内の主な出来事
大正	1918	大雪	1918	狩猟法制定
	1921	荒川発電所完成	1923	関東大震災
昭和	1933	丸八百貨店建設。江若鉄道のバス路線岩瀬－安曇川駅間開通	1933	国際連盟を脱退
	1938	水害により岩瀬の堤防決壊	1938	国家総動員法が公布
	1941	森林組合設立	1941	太平洋戦争始まる
	1948	村の人口が最多(5,120人)を記録	1947	教育基本法が公布
	1951	朽木中学校の西校舎が古屋に完成	1950	朝鮮戦争が始まる
	1955	朽木西小学校校舎が完成	1954	第五福竜丸事件
	1962	雲洞谷まで江若バス路線が延長		高度経済成長期
	1965	滋賀県造林公社が設立	1964	外材の輸入自由化
	1963	村全域への送電が完了	1965	山村振興法
	1971	朽木村が過疎地域の指定を受ける	1969	新全国総合開発計画
	1973	宮前坊と岩瀬にヘアリング工場を誘致	1970	過疎地域対策緊急措置法(過疎法)
	1974	びわ湖造林公社が設立	1972	沖縄諸島返還
	1979	麻生に「朝日の森」が開設	1973	石油ショック
	1983	村営朽木スキー場が開設		
	1984	豪雪		
	1987	朽木新本陣が完成		
1988	グリーンパーク「思い出の森」が開設			
	1988	朝市開始		
平成	1989	北川ダムの建設事業開始	1989	消費税導入
	1990	「鯖・美・庵祭り」開始		
	1992	朽木いきものふれあいの里が開設		
	1993	朽木新本陣が道の駅に登録		
	1995	「くつき温泉てんくう」がオープン	1995	阪神・淡路大震災
	1998	小規模特別養護老人ホーム「やまゆりの里」が開設	2000	過疎地域自立促進特別措置法
	2003	町村合併の是非を問う住民投票実施		平成の大合併
	2005	高島郡6町村が合併して高島市となる		

注：朽木村史編さん委員会編2010を参照した。

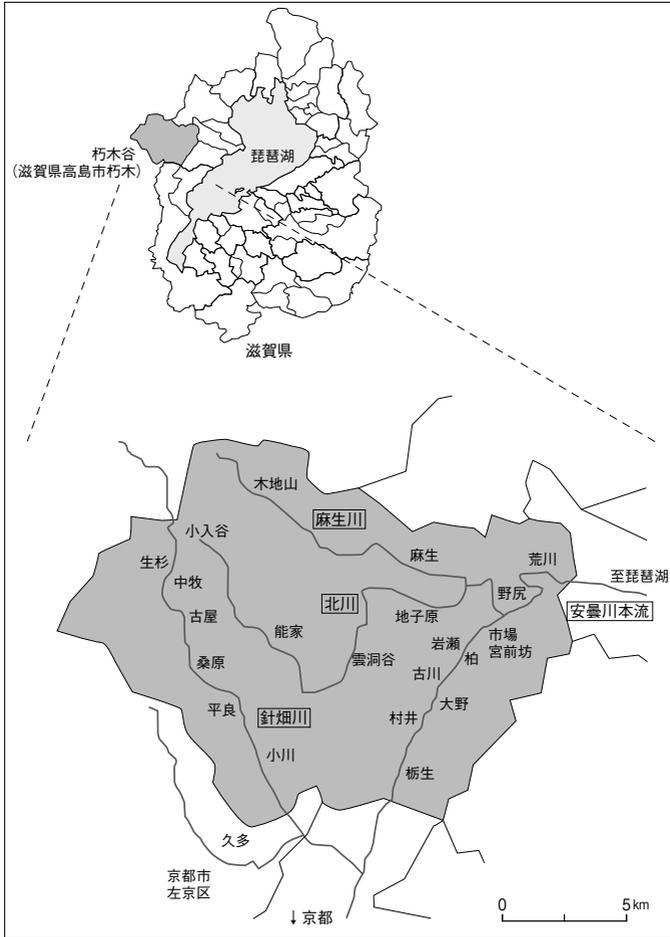


図0-1 朽木谷位置図(藤岡 2006)

「朽木」は京都近郊に位置し、京都から北北東に延びる安曇川^{あんと}沿いに車で1時間あまり走ると、滋賀県^{たかしま}高島市^{くつき}朽木にたどり着く。朽木は、2005年に町村合併で高島市になる以前は、滋賀県唯一の村であった(図0-1、写真0-1)。安曇川は京都市から福井県との県境付近まで続く花折断層^{はなおれ}の断層崖に沿って流れる川である。この安曇川沿いの道は、古くから若狭国小浜^{おぼま}と京都を結ぶ、いわゆる「鯖街道^{さばかいどう}」と呼ばれ、若狭湾で取れたサバが行商人に担がれ、徒歩で京都

まで運ばれた。

また、朽木は「朽木そまのすま」と呼ばれ、京都への木材の供給地でもあった。朽木では、中世以前から木材の産出地域としての役割を担っていたが、近世に入ると、木き地じ職人の定住が見られ、特定の集落を中心に木地物の生産が行われ、全国でも有数の生産量を誇った。し



写真 0-1 滋賀県朽木(旧滋賀県朽木村、現在高島市朽木)の風景

かしながら、近代に入り、国内の漆器生産が発展していくとともに小規模生産であった木地物の生産は途絶え、山林の産業利用は木炭と木材の生産が中心となった。高度経済成長期に前後し、外材輸入の増加、燃料革命などを背景とする需要の激減から、木材、木炭ともに生産量を大幅に下げた(井出・通山 2012、朽木村史編さん委員会編 2010)。

朽木を鎌倉時代から江戸時代まで治めていたのは朽木氏である。1570年に織田信長の朝倉攻めの際に浅井長政が突如朝倉方について南北から挟み打ちにあったとき、信長は浅井の領地である湖東を避けて朽木経由で京都に撤退をした。信長がわずかの兵をつれて朽木街道に入ると朽木元綱は信長を助け、信長は無事帰京することができた。信長軍の最後尾にいた秀吉と家康は、朝倉軍の追撃をかわしながら、秀吉は木き地じ山、家康は針はり焔はたを越えたと伝えられている。

このような歴史的に重要な地であった朽木は、いわゆる中山間地域であり、冬には多くの積雪がある寒冷な土地である。鯖街道を使ってサバなどの海産物を担ぐ運び手は、寒冷な峠を越えなければならない冬には減少した。しかし、冬に針焔峠を越えて運ばれたサバは寒さと塩で身が引きしまって特においしかったようだ。

朽木は、滋賀県下のなかでも、過疎化の進行がきわめて顕著な地域のひとつである。人口が減少し始めたのは、1955年以降からであり、1948年に5120人あった人口は、2004年には2426人にまで減少した。朽木谷のなかでも、過疎

化の進行がもっとも著しいのが、針畑川流域の諸集落である。近年、集落外からの移入者がみられ、新たな活動を行っている。

筆者が頻繁に朽木を訪れるようになったのは2001年からである。筆者は1996年に京都大学に赴任し、しだいに、京都の近くであって、豊かな自然をもち、歴史や

伝統、文化が脈々と息づいている、この朽木に魅了されるようになった。京大の一般教養の授業で自然地理学の講義を受け持つと、学生たちから自然地理を勉強できる研究会を作って欲しいという要請を受けるようになる。そして、2001年4月に「京都大学自然地理研究会」が発足したのであった。

自然地理研究会はおもに季節の良い春～初夏と秋に野外実習を行って、地形・地質や植生、土壌、気候など自然地理学を野外で学習する目的で作られたものである(写真0-2)。しかし、実際には自然だけにとどまらず、歴史や社会、文化をも含めた野外での多角的な勉強会になったのである。その野外実習において圧倒的に多数回訪れたのが朽木であった。朽木が研究会の多くの実施場所になった理由は、やはり京都から近いにもかかわらず、地形・地質、植生、土壌、歴史、文化、社会など、多分野にわたって興味深い野外実習を行えるからであった。

この研究会は2001年から現在(2018年)まで、100回以上の野外実習を行っている。研究会を続けているうちに、もっと研究の目的をはっきりさせて集中的に調査を行いたいという参加者からの意見を受け、2004～2005年度日本生命財団研究助成金「滋賀県朽木谷における里山利用の動態に関する総合的研究—生活システムの変容と地域社会の再編との関係に着目して—」、2011年度財団法人国際花と緑の博覧会記念協会調査研究助成「滋賀県朽木の巨樹に関する文化・生態調査」、2012年度福武学術文化振興財団助成金「滋賀県朽木に



写真0-2 朽木での自然地理研究会の野外実習の様子
(2013年5月撮影)

おけるトチノキ巨木林をめぐる地域変容——山村の資源利用ネットワークの発達と山域の環境変化に着目して——」などの各種助成金による集中的な研究調査を行ってきた。それらの調査によって、さらに多くの朽木に関わる研究者らと密接な関係を持つようになってきたのである。そして、その活動とともに地域住民の方々と交流を持つようになってきた。

本書はそのような朽木に深く関わってこられた研究者のみなさんの研究成果を一般向けにわかりやすく解説したものである。とくに2017年3月29日に、筑波大学で開催された2017年日本地理学会春季学術大会において、「滋賀県朽木におけるトチノキ利用からみた人と自然の関わり」のシンポジウムを、京都大学自然地理研究会やネイチャー・アンド・ソサエティ研究グループ、地球研実践プロジェクトFS「ヒト・自然・地域ネットワークの再構築」と共催して実施した。

このシンポジウムのオーガナイザーは筆者であるが、座長の渡辺和之さん(阪南大学)より、シンポジウムの成果を活かすような朽木の本をぜひ出版して欲しいと熱望され、また、筆者自身も長年研究会メンバーらの朽木での調査成果を一冊の本にまとめるには良い機会だと考えた。そこで、朽木の本なので滋賀県の出版社である海青社の宮内久さんをお願いして出版が実現となったのである。

朽木に関し詳しくまとめられた著書には、『朽木村志』(橋本編 1974)や『朽木村史』(朽木村史編さん委員会編 2010)などがある。しかし、本書は実際の現地調査から朽木の自然や社会、文化など多方面から紐解いた唯一の著書であると言えるであろう。本書によって読者の方々にさらに朽木について知って興味を持っていただければ幸いである。

2018年5月

水野一晴

【引用文献】

井出健人・通山絵美(2012)「朽木の山林資源の利用史」、京都大学自然地理研究会編『滋賀県朽木の巨樹に関する文化・生態調査』、2011年度財団法人国際花と緑の博覧会記念協会・調査研究開発助成事業報告書、23-35頁。

朽木村史編さん委員会編(2010)『朽木村史』滋賀県高島市。

橋本鉄男編(1999)『朽木村志』、朽木村教育委員会。

藤岡悠一郎(2006)「調査地の概要」、水野一晴編『滋賀県朽木谷における里山利用の動態に関する総合的研究—生活システムの変容と地域社会の再編との関係に着目して—』、日本生命財団環境問題研究助成金報告書(2004-2005年度)。

京都大学自然地理研究会 <http://jambo.africa.kyoto-u.ac.jp/cgi-bin/spg/wiki.cgi>

朽木谷の自然と社会の変容

目 次

【口 絵】

朽木の自然環境.....	ii
朽木の特色ある植生と植物.....	ii
朽木の歴史と文化.....	iii
鯖街道と朽木の地形.....	iii
“流域”を超える朽木のモノと生き物.....	iv
ヤマとタンボを結ぶホトラ.....	iv
「山村遺産」としての炭焼き窯跡.....	v
用材と木地を生んだ針広混交林.....	v
山の幸としての植物資源.....	vi
トチ餅——山村の伝統食からおみやげへ.....	vi
朽木とトチ.....	vii
朽木の生き物と人々の関わり.....	vii
土地に生きるカミの行方.....	viii
過疎・高齢化の進行と直面する課題.....	viii
住民の暮らしと行商.....	ix
トチノキの巨木と伐採問題.....	ix
獣害問題の深刻化.....	x
山林植生の変遷.....	x
朝市と地域資源の活用.....	xi
朽木らしさの未来を考える.....	xi
朽木の地形①.....	xii
上空から見た朽木.....	xiii
朽木の地形②.....	xiv
朽木の植生.....	xvi

はじめに.....	水野一晴.....	1
-----------	-----------	---

第 I 部 朽木地域の概要 15

第 1 章 朽木の自然環境	水野一晴.....	17
1.1 朽木の地形.....		17
1.2 花折断層と地震.....		20
1.3 朽木の気候.....		22
1.4 おわりに.....		23
第 2 章 朽木の特色ある植生と植物	青木 繁.....	25
2.1 はじめに.....		26
2.2 朽木のブナ林.....		27
2.3 朽木のトチノキの森.....		31
2.4 朽木の特色ある植物.....		33
2.5 おわりに.....		37
第 3 章 歴史と文化	鎌谷かおる.....	39
3.1 はじめに——歴史の中の朽木.....		40
3.2 朽木を通る道——湖と海と京をつなぐ.....		42
3.3 山の資源利用の歴史——林業・炭焼・ <small>きじわん</small> 木地椀.....		43
3.4 おわりに.....		45

第 II 部 山村の暮らしと自然環境 49

第 4 章 鯖街道と朽木の地形	手代木功基.....	51
4.1 はじめに.....		52
4.2 鯖街道と朽木.....		52
4.3 網の目状に発達した道と地形環境.....		56
4.4 現在も残る鯖街道.....		58
4.5 おわりに.....		60
第 5 章 “流域” を超える朽木のモノと生き物 —— 木材と魚 ——	嶋田奈穂子.....	63
5.1 はじめに.....		63

5.2	安曇川の魚の利用.....	65
5.3	筏流し.....	67
5.4	流域を越えるモノと生き物.....	70
第6章	ヤマとタンボを結ぶホトラ 藤岡悠一郎.....	73
6.1	日本の草地.....	73
6.2	朽木谷の生業.....	75
6.3	山村の農業を支えたホトラ.....	78
6.4	ホトラヤマの植生景観の変化.....	80
6.5	おわりに.....	82
第7章	山林資源の利用1 — 「山村遺産」としての炭焼き窯跡 — 飯田義彦.....	87
7.1	滋賀県における木炭生産の推移.....	88
7.2	朽木の木炭生産のあゆみ.....	89
7.3	雲洞谷での炭焼きの状況.....	91
7.4	雲洞谷での炭焼き復活の動き.....	95
7.5	おわりに.....	98
第8章	山林資源の利用2 — 用材と木地を生んだ針広混交林 — 飯田義彦.....	101
8.1	はじめに.....	102
8.2	中央政権に近い朽木.....	103
8.3	近世以前の針葉樹の利用.....	104
8.4	近世以前の広葉樹の利用.....	106
8.5	近代以降の森林資源利用.....	108
8.6	おわりに.....	109
第9章	山林資源の利用3 — 山の幸としての植物資源 — 藤岡悠一郎.....	111
9.1	はじめに.....	112
9.2	朽木で利用されてきた植物.....	113
9.3	トチノミの採集.....	117
9.4	非木材林産物利用の変化.....	120
9.5	おわりに.....	123

第 10 章 トチ餅 —— 伝統食からおみやげへ ——	八塚春名	127
10.1 トチ餅とは		128
10.2 トチ餅の位置づけの変化		129
10.3 朽木におけるトチ餅のつくり方		130
10.4 「おみやげ」になったトチ餅		134
10.5 トチ餅をつくり続ける		135
第 11 章 朽木とトチ —— 京都市久多との比較で見た場合 ——	中村 治	137
11.1 はじめに		138
11.2 スギの植林に関する違い		139
11.3 炭の運搬先に関する違い—— 道路事情・運搬手段の変化		140
11.4 久多が京都に属し、朽木が滋賀に属した理由		141
11.5 トチの木と朽木の林業		142
11.6 備荒食品としてのトチの実		143
11.7 「納豆餅」、「餅味噌雑煮」と朽木		144
11.8 おわりに		147
第 12 章 朽木の生き物と人々の関わり	藤岡悠一郎	151
12.1 多様な自然環境と生き物		152
12.2 動物に関するエスノサイエンス		153
12.3 狩猟対象としての動物		157
12.4 植生環境と動物種の変化		159
12.5 おわりに		162
第 13 章 朽木の神社地誌 —— 土地に生きるカミの行方 ——	嶋田奈穂子	165
13.1 はじめに		165
13.2 「神社」とは何か—— 聖地とはなにか ——		166
13.3 朽木の神社		167
13.4 安曇川流域のシコブチ神社		172
13.5 神社が表す暮らしの変化		177

第Ⅲ部 現代の山村 181

第14章 過疎・高齢化の進行と直面する課題	木村道徳	183
14.1 はじめに.....		184
14.2 村政発足当時の朽木の課題.....		186
14.3 過疎地域緊急措置法から見る朽木村の課題と方針(昭和45年~).....		187
14.4 過疎地域振興特別措置法から見る朽木村の課題と対策(昭和55年~).....		189
14.5 第三次及び第四次朽木村総合発展計画から見る課題と方針(平成3年~).....		190
14.6 過疎地域自立促進特別措置法から見る課題と方針(平成22年~).....		192
14.7 現在の朽木の住民意識.....		193
14.8 おわりに.....		196
第15章 住民の暮らしと行商	伊藤千尋	201
15.1 はじめに.....		202
15.2 調査対象集落.....		203
15.3 朽木における行商：過去.....		204
15.4 朽木における行商：現在.....		207
15.5 行商を利用することの意味とは？.....		214
第16章 トチノキの巨木と伐採問題	手代木功基	219
16.1 はじめに.....		220
16.2 なぜ朽木にトチノキが数多く存在するのか.....		221
16.3 巨木の伐採問題とその背景.....		225
16.4 巨木を保全する取り組み.....		227
16.5 おわりに.....		229
第17章 獣害問題の深刻化	山科千里・藤岡悠一郎	233
17.1 深刻化する獣害.....		234
17.2 滋賀県における鳥獣害と対策.....		237
17.3 朽木住民の野生動物に対する認識.....		242
17.4 トチノミをめぐる人と野生動物の関係.....		246
17.5 おわりに.....		251

第 18 章 山林植生の変遷	手代木功基	255
18.1 はじめに.....		256
18.2 植生景観の変遷.....		256
18.3 山林利用の歴史.....		260
18.4 近年の変化.....		262
18.5 おわりに.....		264
第 19 章 朝市と地域資源の活用	藤岡悠一郎	267
19.1 はじめに.....		268
19.2 朝市の始まり.....		269
19.3 朝市で販売される商品.....		272
19.4 出店の原動力と課題——トチ餅生産者の事例.....		275
19.5 朝市出店の持続性.....		278
19.6 おわりに.....		279
第 20 章 朽木らしさの未来を考える	熊澤 輝一	283
20.1 はじめに.....		284
20.2 朽木らしさと未来について.....		285
20.3 豊かな過去を持って未来と向き合う——古写真ワークショップの実施.....		287
20.4 未来を物語るための取り組みと朽木らしさ.....		291
20.5 朽木らしさに接近しながら未来をともに考える手立て.....		299
20.6 おわりに.....		301
文献紹介.....		305
索 引.....		309
おわりに.....	水野一晴・藤岡悠一郎	314
執筆者一覧.....		317

第 I 部 朽木地域の概要



冬の朽木

このプレビューでは表示されないページがあります。

第1章 朽木の自然環境



興味深い朽木の着眼点



写真1-1 花折断層による破碎帯が削られてできた朽木谷を流れる安曇川
写真右手が比良山地。

朽木は安曇川沿いの、東に高度1200mに達する比良山地、西に標高900m以下の丹波高地に挟まれた谷に位置し、かつては林業が盛んであった土地である。冬は寒く、雪深い。京都から車で1時間あまりの距離にあるものの、今なお古くからの伝統や慣習が色濃く残っている。この朽木谷の自然はどのような地形や気候によってもたらされているのであろうか？

1.1 朽木の地形

朽木谷(滋賀県高島市朽木)は、滋賀県の北西部に位置し、東西約24km、南

このプレビューでは表示されないページがあります。

第2章 朽木の特色ある植生と植物



興味深い朽木の着眼点



写真 2-1 雪の多い朽木を特徴つける日本海型のブナ林 (2016年4月20日撮影)

ある地域の暮らしや文化を学ぶ時、その背景となる自然環境が深くかかわっていることに気づく。例えば、雪の多い所では住宅を建てる時、雪の重みに耐えることのできる建築材として、多雪の中で根曲がりしたものを軒材に使用する。また、雪の中を歩くかんじき(輪かん)という道具は、厳しい自然環境の中でゆっくりと成長し、しかも、雪の重みに耐えてきた粘りのあるハイイヌガヤなどの木が使われる。自然は、日々営まれる衣食住のあらゆる場面で深く関わっている。もちろん、今ある暮らしは近代化の中で、地域の特性は薄れ、形骸化し失われてしまったものもたくさんある。「地域をより深く知りたい。」「地域にもう一度活気を取り戻したい。」など、地域への思いを確かめる時、地域の自然(写真 2-1)を知ることとで、解決の糸口が見出されるかもしれ

このプレビューでは表示されないページがあります。

第Ⅱ部 山村の暮らしと自然環境 (～昭和30年頃)



山の神への供物

このプレビューでは表示されないページがあります。

第4章 鯖街道と朽木の地形



興味深い朽木の着眼点



写真4-1 朽木で売られている鯖寿司
(2012年撮影)

朽木を巡っていると、しばしば「鯖」の字を目にする。鯖寿司、焼き鯖、鯖のへしこなど、道の駅やその周辺の店舗には様々なサバ加工品が売られている(写真4-1、4-2)。さらに、朽木の中心部である市場いちばを通る国道367号は別名で「鯖街道」と呼ばれている。なぜ海の近くでもない朽木でサバが地域の特産品として売られ、街道の名称にまでなっているのだろうか？



写真4-2 朽木市場いちばの「鯖の道」の碑
(2012年撮影)

このプレビューでは表示されないページがあります。

第5章 “流域”を超える朽木のモノと生き物 — 木材と魚 —



興味深い朽木の着眼点



写真5-1 あど安曇川源流のひとつ(朽木おいすぎ生杉)

おおかわ「大川」という言葉が、朽木の人の話の中によく出てくる。大川の名がつけられた神社もある。しかし、地図上にはどこにも「大川」という川はない。朽木の暮らしの中で、「大川」とはどのような存在なのだろうか？ 朽木の河川利用を、「大川」を一つのキーワードとして考えてみたい。

5.1 はじめに

数年前、あどがわ安曇川上流域で産出される木材の流通を支えた筏流しについての調査に参加した。調査者の一人は朽木在住の方で、長く中学校で教師をされていた

このプレビューでは表示されないページがあります。

第6章 ヤマとタンポを結ぶホトラ

— かりしき 刈敷と里山利用の変遷 —



興味深い朽木の着眼点



写真6-1 現在のホトラヤマの景観

朽木には、かつて、水田にすき込む肥料や家畜の敷草を調達するための採草山であるホトラヤマが集落の周囲に広がっていた。人々は毎年春先に集落総出の共同作業によってヤマを焼き、その後に芽生えた膝丈ほどのコナラの幼樹（これをホトラと呼ぶ）の茎葉を各世帯の女性が刈り取った。現在、昔のホトラヤマでは、写真のように森林化が進んでいる。ホトラヤマは、かつてどのように利用され、どのような変遷をたどっていったのであろうか？

6.1 日本の草地

朽木の年長者に昔の生活について話を聞いていると、「昔はホトラを刈って

このプレビューでは表示されないページがあります。

第10章 トチ餅

— 伝統食からおみやげへ —



写真 10-1 トチ餅づくりに重要な灰を使ったアク抜き(2012年10月16日撮影)

朽木を訪れる人びとの多くは、旅のおみやげとして、鯖寿司やトチ餅を購入して帰る。若狭湾から朽木をとおり京都へと続く通称「鯖街道」は、昔から鯖をはこぶ大事な街道であった。同時に、豊かな広葉樹の山を有する朽木では、昔から人びとはトチノミを採集し、かさ増しを目的にコメに混ぜたり、モチ米と搗いてトチ餅をつくったりしてきた。朽木の人びとにとって、トチ餅は、おみやげである前に、重要な救荒食であり、地域の伝統食でもあった。朽木で出会ったある女性は、トチ餅について聞き取りをするわたしに、こういったことがある。「むかしは一番わるい餅やったのに、今は一番カネになる餅になった。」

トチ餅が救荒食からおみやげとして商品化される過程は本書19章にゆずる

このプレビューでは表示されないページがあります。

第13章 朽木の神社地誌

— 土地に生きるカミの行方 —



興味深い朽木の着眼点



写真 13-1 鳥居のない社(雲洞谷犬丸 下社)

朽木にはところどころに小さな社がある。鳥居がないので神社ではないかもしれない。が、しめ縄があるのでただの小屋ではない。名の知れた社名がついているわけでもなく、文献等で扱われることもない。集落や道路の片隅にひっそりと佇む社は、めだたないからこそ集落や地域独自の歴史と暮らしの中で今日まで祀られ、そこにあり続けたのだろう。これらの聖地は、どのような思想のもとに、何が祀られているのだろうか？

13.1 はじめに

朽木の暮らしに根付く信仰あるいは思想を、朽木に点在する神社“地”から

このプレビューでは表示されないページがあります。

第Ⅲ部 現代の山村



市場の盆踊り

このプレビューでは表示されないページがあります。

第15章 住民の暮らしと行商



興味深い朽木の着眼点



写真 15-1 行商から買い物をする利用者の様子(2012年11月3日撮影)

朽木は、「鯖街道」と呼ばれる街道筋に位置しており、古くから行商人ぎょうしょうにんが行き交う地域であった。かつての行商人は、徒歩や自転車により移動し、朽木のような山間部にも様々な商品を届けてきた。また、行商人を泊めるなど個別の社会関係も存在していた。すなわち、行商は、朽木という地域社会の一部として存在していたのだ。

一方、交通アクセスの改善や自動車の普及、そして産業構造の転換により、人々の働き方、生活スタイル、行動範囲は1960年代から劇的に変容してきた。この流れの中で、全国的にも行商人は大きく減少している。しかし、写真のように、現在の朽木では自動車で行商人が訪れている様子を見ることができる。

何もかもが便利になったように思える現代社会において、いったいどのような人々が行商を利用しているのだろうか？ また、彼ら／彼女らの生活において、行商人からモノを買うことはどのような意味を持っているのだろうか？

このプレビューでは表示されないページがあります。

第16章 トチノキの巨木と伐採問題



興味深い朽木の着眼点



写真 16-1 朽木のトチノキ巨木林(2011年筆者撮影)

2010年の秋ごろから、朽木は度々新聞記事に取り上げられた。それは、朽木に生育するトチノキの巨木の伐採問題や保護・保全に向けた運動に関する記事であった。一般的に、トチノキをはじめとする木材資源は、人間が古くから生活の中で利用してきたものである。そのため木が伐採されること自体は、珍しいことではない。しかし、どうして新聞に取り上げられるほどにトチノキの伐採は問題となり、保全活動が展開してきたのだろうか？そして、この報道の主役となったトチノキの巨木は、朽木のどのような環境に生育しているのだろうか。

このプレビューでは表示されないページがあります。

第20章 朽木らしさの未来を考える



興味深い朽木の着眼点



写真 20-1 朽木の未来へつなく物語づくり第3回の様子

(2018年1月21日撮影: 王智弘氏)

ある日の夜、京都市の中京区で行われていた針畑^{はりばた}地域の生活用具づくりの記録を上映する大学のイベントに参加したら、そこに市役所の朽木支所の方がおられた。その日のうちに朽木に帰るといふ。そう、暗い夜道とはいえ車で1時間と少し。朽木は京都の街中にとっても近いのだ。一方で、雲洞谷^{うらたに}で新たに炭窯を立てたので火入れすると聞いて行って見たら、小屋を組む木の番線の結び方一つとっても先達の知恵が詰まっていることを知る。この地域はいったい何でできているのか？ 少なくともいろいろな顔を持っている。もしも、人々が朽木に対して抱く豊かさや魅力の源泉が、これらの要素がないまぜになっていることにあるとしたら、これを表現して共有し、未来に引き継いでいく

このプレビューでは表示されないページがあります。

文献紹介

(1) 朽木の地域をさらに学びたい方に参考になる文献

- 石田 敏(2013)『安曇川と筏流し』、私家版。
- オノミュキ(2001)『HODI HODI朽木村』、サンライズ出版。
- オノミュキ(2012)『山村大好き家族—ドタバタ子育て編』、サンライズ出版。
- オノミュキ(2013)『山村大好き家族—おもしろ生活編』、サンライズ出版。
- 京都大学自然地理研究会編(2011)『滋賀県朽木の巨樹に関する文化・生態調査』、2011年度財団法人国際花と緑の博覧会記念協会・調査研究開発助成事業報告書。
- 朽木村(1951)『農山村二ヶ年の歩み 朽木村政白書第一号』。
- 朽木村(1990)『朽木村百年誌 明治二十二年～平成元年』。
- 朽木村教育委員会編(1999)『朽木の植物(上・下)』サンライズ出版。
- 朽木村史編さん委員会編(2010)『朽木村史(通史編・資料編)』、滋賀県高島市。
- 小林圭介監修(1997)『ふるさと滋賀の森林』、サンライズ出版。
- 滋賀県高等学校理科教育研究会地学部会(2002)『改訂滋賀県 地学のガイド(上)—滋賀県の地質とそのおいたち』コロナ社。
- 滋賀県市町村沿革史編さん委員会編(1962)『滋賀県市町村沿革史』。
- 滋賀自然と文化研究会編(1969)『朽木谷学術調査報告書』、滋賀県。
- 特定非営利活動法人柚の会編(1990)『雑木山生活誌資料：朽木村針畑谷の記録 1988～1990』、特定非営利活動法人柚の会。
- 日本の食生活全集滋賀編集委員会編(1991)『日本の食生活全集 25 聞き書 滋賀の食事』、農山漁村文化協会。
- 橋本鉄男編(1974(1982))『朽木村志』、朽木村教育委員会。
- 水野一晴編(2004)『滋賀県朽木谷における里山利用の動態に関する総合的研究—生活システムの変容と地域社会の再編との関係に着目して—』、日本生命財団環境問題研究助成金報告書(2004-2005年度)。
- 八木 透編(2000)『フィールドから学ぶ民俗学—関西の地域と伝承』、昭和堂。

(2) 各章の内容に関わる分野・領域・方法論などについてさらに学びたい方にお勧めの文献

第1章

水野一晴(2015)『自然のしくみがわかる地理学入門』、ベレ出版。

第2章

青木 繁(2012-2013)「トチノキの里で考える」、湖国と文化 139号～143号、滋賀県文化振興事業団。

このプレビューでは表示されないページがあります。

索引

地名

あ行

麻生(あそ) 166
 麻生川(あそがわ) 113, 152
 安曇川(あどがわ) 4, 17, 20, 23, 39, 113, 152
 綾部(あやべ) 18, 228
 荒川(あらかわ) 166, 288
 市杵島神社(いちきしまじんじゃ) 166
 市場(いちば) 20, 22, 114, 287
 伊吹神社(いぶきじんじゃ) 166
 岩瀬(いわせ) 166, 275, 288
 雲洞谷(うとたに) 91, 95, 117, 166, 275, 283
 夷神社(えびすじんじゃ) 166
 家一(えべつ) 168
 生杉(おいすぎ) 69, 81, 151, 168
 近江耶馬溪(おうみやげけい) 21, 34
 大川神社(おおかわじんじゃ) 168
 大野(おおの) 166
 大宮神社(おおみやじんじゃ) 166
 尾越(おごせ) 139, 141, 142, 144, 145, 147, 148
 御救山(おすくいやま) 41
 オンノノ(怨念の)平 21

か行

柏(かせ) 169
 葛川(かつらがわ) 293
 葛川梅ノ木町(かつらがわうめのきちょう) 21
 葛川明王院(かつらがわみょうおういん) 21
 木地山(きじやま) 5, 106-108
 北川(きたがわ) 113, 152
 北川(きたがわ)ダム 153
 旧秀隣寺庭園(きゅうしゅうりんじていえん) 169
 久多(くた) 137-149, 293

朽木溪谷(くつきけいこく) 21
 朽木荘(くつきしょう) 40
 朽木新本陣(くつきしんほんじん) 190, 267
 朽木藩(くつきはん) 108
 熊川断層(くまかわだんそう) 56
 桑原(くわばら) 119, 166
 興聖寺(こうしょうじ) 169
 小川(こがわ) 69, 139, 142, 166

さ行

鯖街道(さばかいどう) 4, 42, 273
 シコブチ神社(志子淵神社・思子淵神社) 105, 166, 170-177
 地子原(じしはら) 166, 292
 園部(そのべ) 18
 襲速紀(そはやく)地域 34

た行

高島市(たかしまし) 4, 17
 高島市立朽木資料館(たかしましりつくつきしりょうかん) 110
 丹波高地(たんばこうち) 17, 18, 152
 丹波帯(たんばたい) 18
 栃生(とちう) 166
 途中越 140, 141

な行

中牧(なかまき) 23, 166
 瓊々杵神社(ににぎじんじゃ) 166
 能家(のうげ) 166
 能見峠(のうみとうげ) 138
 野尻(のじり) 166, 288

は行

八皇子神社(はちおうじじんじゃ) 166
 八幡神社(はちまんじんじゃ) 166
 針畑(はりはた) 5, 22, 283, 287

このプレビューでは表示されないページがあります。

おわりに

2005年から2006年にかけてピークを迎えた市町村合併、いわゆる平成の大合併により、永らく滋賀県唯一の村であった朽木村は、高島町や安曇川町、新旭町、今津町、マキノ町と合併して高島市となった。しかし、自然や歴史、文化、社会などにおいてユニークな朽木は、合併によって「朽木」という行政区画名(自治体名)が消滅した後、かえって地域住民や関係者の朽木へのアイデンティティが強まったのではないだろうか。朝市開催やトチ餅作りなどを通して、その伝統や地域コミュニティの存続に対する努力がいつそう盛んになったような気がする。トチノキの巨木伐採問題が生じたときも、朽木の森を守るという地域住民の大きな力が動きだした。

しかし、朽木は他の中山間地域と同様、過疎化の波が押し寄せ、人口が急激に減少している。このような現状の中、朽木に魅せられた研究者らは、朽木の過去から現在までの自然、社会、経済、文化、歴史などの実態を1冊の本としてまとめ、広く世間に知ってもらうことが重要なのではないかと感じた。朽木という一つの地域を舞台に様々な観点で地域を捉えていくと、自然環境や社会、文化、人々の営みが相互に深く結びつき、総体として地域が移り変わっていく様子が理解できる。地域の変容を捉え、将来を考えていくとき、一部の要素だけを切り取るのではなく、広い視野で地域を見つめることが重要であると考えた。そのため、複数の分野にまたがるような構成になるように気を配った。また、編集に際しては、朽木というミクロなスケールで生じている事象を具体的に描写するとともに、他地域の例などを見渡ししながら、少し俯瞰的な視点での説明を加えることを心掛けた。これらの点にこだわったのは、朽木を知らない読者の方々に朽木のたくさんの魅力や近年生じていることを知っていただきたいと考えたのと同時に、朽木に暮らしている方々には、外部の研究者が朽木をどのように見ているのかということを知っていただきたいからである。

本書の執筆にあたり、朽木に暮らす多くの方々や朽木に関わる活動をされている地域内外の皆様にも多大なご協力を賜った。とりわけ、びわ湖高島観光協会

(旧朽木村観光協会)、滋賀県立朽木いきものふれあいの里(当時)、巨木と水源の郷をまもる会、朽木住民福祉協議会、上針畑防災福祉組、高島市教育委員会文化財課、栃餅保存会、「朽木のみんなど円卓会議」の皆様、澤田龍治さん(当時、びわ湖高島観光協会)、山本智美さん(当時、びわ湖高島観光協会)、石田敏先生、坂下靖子さん(たかしま市民協働交流センター・事務局長)、王智弘さん(総合地球環境学研究所・研究員)には格別のご支援をいただいた。ご協力・ご支援をいただいたすべての方々に、執筆者一同より心からお礼を申し上げます。

本研究を進めるにあたり、以下の助成を受けた。日本生命財団環境問題研究助成「滋賀県朽木谷における里山利用の動態に関する総合的研究」(2004～05年度：代表 水野一晴)、財団法人国際花と緑の博覧会記念協会調査研究開発助成「滋賀県朽木の巨樹に関する文化・生態調査」(2011年度：代表 水野一晴)、福武学術文化振興財団研究助成「滋賀県朽木におけるトチノキ巨木林をめぐる地域変容」(2012年度：代表 水野一晴)、日本生命財団平成27年度若手研究・奨励研究助成「里山生態系におけるトチノキ巨木林の立地環境と社会・生態的機能の解明」(2015～16年：代表 藤岡悠一郎)、公益財団法人国土地理協会学術研究助成「トチノキ巨木林の分布と成立要因に関する地理学的研究：文化景観としての評価に向けて」(2018～19年：代表 藤岡悠一郎)、科学研究費基盤研究(C)「オントロジーを用いた環境共生への地域ストーリーの共同構築手法の開発」(2015～2018年度：代表 熊澤輝一)、総合地球環境学研究所・所長裁量経費(2013～14年度：代表 手代木功基)。記して謝意を申し上げます。

本書を出すきっかけは、「はじめに」でも述べたとおり、2017年の日本地理学会で開催されたシンポジウム「滋賀県朽木におけるトチノキ利用からみた人と自然の関わり」である。そのシンポジウムを我々に打診されたのは、ネイチャー・アンド・ソサエティ研究グループの渡辺和之さんであり、シンポジウムがなければ本書は世に出なかった。ここに感謝したい。また、本書の出版を快く引き受けてくださった海青社の宮内久さん、海青社編集部の福井将人さん、田村由記子さんには出版において大変お世話になった。お礼申し上げます。

本書が、朽木にお住まいのみなさん、朽木のことを知りたいと思っているかた、中山間地域の自然や社会、文化の調査・研究をしたいと思っている学生さん、滋賀県や周辺県にお住まいの方々や日本各地の中間山地域にお住まいのか

た、興味を持たれているかたなど、広く読んでいただければ幸いである。本書が読者のみなさんの考えや行動にいくぶんでも影響を与えることができれば編者として本望である。

2019年1月

編者 水野 一晴
藤岡悠一郎

執筆者一覧

● 編者

水野 一晴 MIZUNO Kazuharu (京都大学大学院文学研究科地理学専修・教授) 第1章

自然地理学、アフリカ地域研究が専門。主な著書・論文に、『世界がわかる地理学入門—気候・地形・動植物と人間生活—』(ちくま新書1314、筑摩書房、2018; 単著)、『気候変動で読む地球史—限界地帯の自然と植生から—』(NHKブックス1240、NHK出版、2016; 単著)、『自然のしくみがわかる地理学入門』(ベレ出版、2015; 単著)がある。

藤岡悠一郎 FUJIOKA Yuichiro (九州大学大学院比較社会文化研究院・講師) 第6、9、12、17、19章

地理学、地域研究が専門。主な著書・論文に、『サバンナ農地林の社会生態誌—ナミビア農村にみる社会変容と資源利用』(昭和堂、2016; 単著)、「農地林の利用と更新をめぐる農牧民の生計戦略—ナミビア農村のポリティカル・エコロジー」(横山 智編『ネイチャー・アンド・ソサエティ研究 第4巻 資源と生業の地理学』海青社、2013; 分担執筆)、「ナミビア北部における『ヤシ植生』の形成とオヴァンボの樹木利用の変容」(水野一晴編『アフリカ自然学』古今書院、2005; 分担執筆)がある。

● 執筆者

青木 繁 AOKI Shigeru (グリーンウォーカークラブ・代表取締役) 第2章

植物生態学が専門。主な著書・論文に、『高島の植物(上・下)』(サンライズ出版、2007; 編著)、『滋賀県の山』(山と溪谷社、2004; 共著)、「朽木の植物相」(滋賀県自然誌編集委員会編『滋賀県自然誌』滋賀県自然保護財団、1991; 分担執筆)がある。

飯田 義彦 IIDA Yoshihiko (金沢大学環日本海域環境研究センター・連携研究員) 第7、8章

景観生態学、自然共生型社会研究が専門。主な著書・論文に、「新たな森の産業創造—石川県の林業事業者の挑戦」(森林環境研究会編『森林環境2017』、102-111頁、森林文化協会、2017; 分担執筆)、『白山ユネスコエコパーク—ひとと自然が紡ぐ地域の未来へ—』(国連大学サステイナビリティ高等研究所いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット、2016; 編著)。「吉野山ヤマザクラ樹林におけるフェノロジー個体差が桜景観維持に果たす役割」(ランドスケープ研究 76(5): 451-456、2013)がある。

伊藤 千尋 ITO Chihiro (広島女学院大学人間生活学部生活デザイン学科・講師) 第15章

人文地理学、アフリカ地域研究が専門。主な著書・論文に、「アフリカ・日本から考える人口問題と都市-農村関係」(矢ヶ崎典隆・森島 済・横山 智編『サステイナビリティ—地球と人類の課題—』、93-103頁、朝倉書店、2018; 分担執筆)、「都市と農村を架ける—ザンビア農村社会の変容と人びとの流動性」(新泉社、2015; 単著)、「滋賀県高島市朽木における行商利用の変遷と現代的意義」(地理学評論 88(5): 451-472、2015)がある。

鎌谷かおる KAMATANI Kaoru (立命館大学食マネジメント学部・准教授) 第3章

歴史学(日本史)が専門。主な著書・論文に、「日本近世における年貢上納と気候変動—近世史研究における古気候データ活用の可能性をさぐる—」(日本史研究 646号、2016)、「日本近世における山野河海の生業と所有一琵琶湖の漁業を事例に—」(ヒストリア 229号、2011)がある。

このプレビューでは表示されないページがあります。

木村 道徳 KIMURA Michinori (滋賀県琵琶湖環境科学センター・主任研究員) 第14章

環境政策、環境情報が専門。主な著書・論文に、「ソーシャルネットワークに着目した住民主導型景観保全活動の継続要因に関する研究—滋賀県近江八幡市を事例として—」(環境情報科学論文集(23): 419-424, 2009)、「低炭素型都市農村連携ネットワークを構築するための業結合モデル—環境モデル都市施策の農林水産業に着目して—」(環境システム研究論文集 37: 377-383, 2009)、「地域森林資源活用団体の活動内容と意識の構造的把握—滋賀県高島市の森林資源活用事例を対象に」(環境情報科学論文集(29): 55-60, 2015)がある。

熊澤 輝一 KUMAZAWA Terukazu (総合地球環境学研究所・准教授) 第20章

環境計画論、地域情報学が専門。主な著書・論文に、「環境・サステナビリティ領域におけるドメイン知識間の因果論理構築支援ツールの開発」(人工知能学会論文 33(3): E-SGAI04_1-13, 2018)、「Initial design process of the sustainability science ontology for knowledge-sharing to support co-deliberation」(*Sustainability Science* 9: 173-192, 2014)、「遺伝的アルゴリズムを用いた「身のまわり環境」計画の合意形成過程の記述に関する基礎的研究」(計画行政 26(2): 60-72, 2003)がある。

嶋田奈穂子 SHIMADA Nahoko (総合地球環境学研究所・研究員) 第5、13章

建築学、思想生態学が専門。主な著書・論文に、「風土を閉じる時—閉村の過程と「神社を閉じる」意味—」(第2回高谷好一地域学賞受賞作品集〈最優秀賞〉, 2019)、「鎮守の森—森の世界に生きる人とカミ」(木部暢子・小松和彦・佐藤洋一郎編『アジアの人々の自然観をたどる』、勉強出版、2013; 分担執筆)がある。

手代木功基 TESHIROGI Koki (摂南大学外国語学部・講師) 第4、16、18章

地理学(環境地理学)が専門。主な著書・論文に、「滋賀県高島市朽木地域におけるトチノキ巨木林の立地環境」(地理学評論 88(5): 431-450, 2015)、「Variations in Mopane Vegetation and its Use by Local People: Comparison of Four Sites in Northern Namibia」(*African Study Monographs* 38(1): 5-25, 2017)がある。

中村 治 NAKAMURA Osamu (大阪府立大学人間社会システム科学研究科・教授) 第11章

京都洛北の地域誌、暮らしと風俗の変化について古写真を用いて研究することが専門。主な著書・論文に、『洛北岩倉と精神医療』(世界思想社、2013; 単著)、『京都洛北の原風景』(世界思想社、2000; 単著)、『洛北岩倉』(コトコト、2007; 単著)がある。

八塚 春名 YATSUKA Haruna (日本大学国際関係学部国際教養学科・助教) 第10章

生態人類学、アフリカ地域研究が専門。主な著書・論文に、「タンザニアのサンダウエ社会における環境利用に関する研究—狩猟採集社会の変容への一考察」(松香堂書店、2012; 単著)、「山村の特産品づくりを支える資源利用ネットワーク—滋賀県高島市朽木におけるトチ餅生産とトチノミ利用」(BIOSTORY 24: 94-106, 2015)、「タンザニアにおける狩猟採集民ハッザの観光実践—民族間関係、個人の移動、収入の個人差に着目して」(アフリカ研究 92: 27-41, 2018)がある。

山科 千里 YAMASHINA Chisato (筑波大学生命環境系・特任助教) 第17章

地域研究、生態学が専門。主な著書・論文に、「Seed dispersal by animals influences the diverse woody plant community on mopane woodland termite mounds」(*Ecosystems*, 2018. online: 10.1007/s10021-018-0283-8)、「シロアリ塚と植物、動物の関わり」[“エラオ(elao)”に集う][自然保護区の野生動物と人](水野一晴・永原陽子編『ナミビアを知るための53章』、明石書店、2015; 分担執筆)、「Importance of bird seed dispersal in the development of characteristic vegetation on termite mounds in north-eastern Namibia」(*Tropics* 23(1): 33-44, 2014)がある。

このプレビューでは表示されないページがあります。

Dynamics of Nature and Society of Kutsuki Valley, Shiga, Japan
edited by MIZUNO Kazuharu and FUJIOKA Yuichiro

くつきだにのしぜんとしゃかいのへんよう

朽木谷の自然と社会の変容

発行日：2019年3月30日 初版第1刷

定 価：カバーに表示してあります

編著者：水 野 一 晴

藤 岡 悠一郎

発行者：宮 内 久



海青社
Kaiseisha Press

〒520-0112 大津市日吉台2丁目16-4
Tel. (077) 577-2677 Fax (077) 577-2688
<http://www.kaiseisha-press.ne.jp>
郵便振替 01090-1-17991

© MIZUNO Kazuharu and FUJIOKA Yuichiro. 2019

ISBN978-4-86099-332-0 C3025 Printed in JAPAN 乱丁落丁はお取り替えいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。
本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用
でも著作権法違反です。